



この夏

紋別で

第37回 全道大会開催地

オホーツク造形サークル

網走支庁

目次	造形連盟を考える時…………… 2	紋別テーマ…………… 3	随想…………… 4・5
	サークル紹介…………… 6	実践校・実践者紹介…………… 7	画筆ネオセブロン…………… 8



北海道 造形教育 連盟報

発行 北海道造形教育連盟

事務所 〒001 札幌市北区新琴似1条3丁目
札幌市立新琴似南小学校 ☎762-3274

No76 1987.5.3 発行



造形連盟を考える時

北海道造形教育連盟事務局長 佐藤 吉五郎

現在の北海道造形教育連盟は、年間を通して2つの事業と1つの研修を行っている。

事業の1つは13回の歴史を持つ北海道教育美術展である。北海道教育美術展は最初は30年の歴史を持って開催されていた「子ども道展」が道展の都合で発展的に終了したのを受け広く北海道の子ども文化を継続して維持していく事を目あてに北海道造形教育連盟が企画担当して開催されたのである。

この美術展は「教育」を重視し、全道各地での美術教育実践をできるだけ望ましい形で発表したいというねらいがあった。

したがって入選の他に各種の賞は設けず、奨励賞として100点を選び、明日の北海道の美術教育の1つの方向を示すことに努力したのである。

毎年12月に札幌で全道各地から応募された相当数の幼、小、中、各校の日常実践から生まれた作品が審査される。本来であれば道内各地区委員の先生方がぜひこれらの作品の審査に当たってほしいのであるが、遠い地方からの参加が無理であり、自然、地元札幌を中心に在住する常任委員を中心に審査会を開いている。教室から生まれる作品というのはどういうものなのか、指導とはどうなのか等、子ども作品を前に討議を重ねながら何とか子ども達の心の中に入っていく指導方法を見つけようと、多数の会員が審査に臨むから、連盟としてもこの事業をどう有効に継続していくべきか考え直す時がきているように思う。

又これとは少し趣を異にする事業の1つとして全道立体造形展がある。これは、読売新聞社と本連盟の共催事業であり、新聞社の力で全道各地区ごとに審査会をもち、地区での造形教育の振興に大きな役割を果たしてきている。この事業も本年で12回目をむかえることになる。立体造形という領域は、日常実践の中ではなかなか大変で、特にその準備性、技術といったところに問題点を含んでいること等から相当に重要な発表の場であるように思う。

以上のような2大事業は造形連盟が全道の各地区サークルと口頃どのように関わって動いているか、どのよ

うに共同研究を深めているかに大きくかかわっているように思われる。

2つの事業とも10年を越す歴史を背負ってきたのだからもうこのあたりでこの事を具体的に考える時がきているように思う。

これらの事業とは別に昨年は旭川市において全国造形教育研究大会を行い連盟本来の目的である「北海道の造形教育」を深めた。この研修も本年度37回をむかえる。

歴史的には多少の変化はあったが、多数の先輩が熟っぽく北海道の造形教育を考え、実践し、討議し、築いてきた実践は、相当な力をもって本日未だ脈々と流れているし、後輩に引き継がれている。

ここ10年教育に対する社会の見方が変化してきているし、子どもたちだって相当に困っていると思う。

あまりにも早い進行と、あまりにも多い情報と、あまりにも忙しい大人達。私達教育現場の教師が今造形教育でしなくてはならないものは何か。

造形教育でどう育てるのか。その方法は、その考え方は、私達は今この問題をゆっくり、静かに話し合いそれぞれが理解する必要に迫られているように思う。もちろん道内各地のサークルの研修と連盟本部の結びつきをどうするか。本部といわれている札幌の機能はこれで良いか等、造形連盟のかかえている課題は大きいのである。

熟年というか、老年というか、高齢者の増加社会は私達の連盟とて別社会の現象ではないのであって、その意味からも新人類と呼ばれる世代をどう引き入れるかの課題も大きいのである。

今中学の美術科をめぐる教育課程改定の動きと、生活科、合科、等教科編成をめぐる新しい動き等教育課程審議会の動向をふまえつつ北海道造形教育連盟はどうあるべきか、機会をもって充分話し合う時期であるように思う。

(札幌・新琴似南小学校校長)



紋別テーマ

表現の喜びにひたる子どもを育てる

オホーツク造形教育連盟 研修部長 西原 進

主題について、「好きこそもの上手」といわれるとおり「何ごと也喜欢だと、それを熱心にやるから上達するのだ」という金言は、芸能教科において欠くことのできない心情である。

子どもの造形活動においては、表現の喜びにひたることによって、描いたり、造ったりするイメージが湧き、五感をフルに働かせて自らの意志と判断によって主体的にものを見たり、触ったり、経験したりする。

また、からだ全体をつかって心に感じたことを視覚的な手段で表現しようとする意欲や態度が培われるのではないだろうか。

オホーツク造形連盟では、今まで子どもたち一人一人が「創り出す心」「創り出す喜び」を感じ、自分の気持ちを視覚的に表現し続けることができる態度を将来に向かって持ち続けることを期待し取り組んできた。

わたしたちは、表現や鑑賞といった活動を通してながら、ものの本質を正しく見抜くことや、自分の意志を思うように表現することができる力を養い、その上で新しいものを発見したり、創り出していく創造力を高めることが、紋別大会の目あてである。

臨教審答申の中に、来るべき21世紀を担う子どもを育成していくための大切な教育の目標として、「ひろい心、すこやかな体、ゆたかな創造力」を育てることであると提言されている。

特に、人間の心と健康の大切さを認識し、子どもの心身ともに健全な均衡のとれた発達に最大限の努力を払うことを中心に教育を推進しなければなりません。

現今の子どもの実態をみると、「物があって心がない」「自分があって他人がない」など子どもの生活の中に、自己の手や体を使って直接体験することが失われてきている。

いわゆる非人間化が進み、マスコミを大きく支配しているテレビ等の間接経験にひたり、子どもたちの創造性や個性の伸長を阻害をはじめテレビゲームやゲームウオッチといった受身の遊びに偏ってきて、手づくりの良さを見失いつつあるのが現状である。

したがって、「表現の喜びにひたる子どもを育てる」ことは、最も今日的な課題の一つである。

これらの課題解決のためには、「主題」「目あて」「目

的」をしっかりとらえて取り組まなければならない。

まず第一に、子どもたちの日常生活の中で「より豊かな心情と環境を醸成する」ことが先決である。

第二に、私たちは「何故子どもに絵を描かせたり、ものを造らせるのか」を認識する必要がある。

第三に、今までは「子どもにどう良い絵を描かせたり、ものを造らせるか」という技術面にこだわり過ぎていたように思われる。これからは、「心のやさしさを育てる」ことを表現活動の目あてにすることが大切である。一人一人の子どもが「好きになった」という体験をつみ重ねていくうちに、本来人間性豊かな子ども達の心をいかにして「思いやり深い、感じやすい、やさしい心」に高めていくかが、緊要な課題である。

教師は、この課題解決にあたって、教師自らやさしい心の状態に自分を培わなければなりません。功利主義、競争主義がどれだけ子どもの心を破壊し、荒廃させているか認識するとともに、子どもをもっと理解し授業の中で、子どもにもっと励ましを与え、自信を持たせることである。表現活動を通して、心の傷が少なくすむよう努力していかなければなりません。

紋別大会では、子どもの現状の中から、指導の手順方法を工夫し授業実践の中で解明していきたい。

子どもたちの学習態度でよく見かけるのは「ただ描けばいい、造ればいい」という態度の子どもがいて、更に「どうせ下手だからだめなんだ」という子どもの中には、形を正確にじっくり見ることができない。描き方や彩色の仕事が雑である。色の使用が概念的である。作品の出来上がりが遅い、集中して取り組めない等、ただなんとなく描く、造る子どもが多い。

これらの傾向を少しでも改善していく手だてや実践を積み重ねるために「表現の喜びにひたる子どもを育てる」ことをテーマとした次第である。

〈気づき〉を大切に「つくる心の広がり」と深まりを求めて、取り組まれた前回の貴重な成果を生かしながら表現活動を好きにさせることによって、ものの形を見て相手を思いやる心を表現することのできる知性と感性のバランスのとれた子どもを育成したい。

(佐呂間町立知来小学校教頭)

◆ 随想

美をめざすもの 美をめざす者

北海道造形教育連盟顧問 川野上 彰



橋本聖子選手を迎えて

在職中の想い出 イコール 造形教育連盟

現職を退いて2年を経過しました。忙しい時代に生きていくせいなのか、時の流れのはやさに驚いています。40年余りも教職の身にありながら、退職してからも、尚、教育関係の仕事に携っていることに対して、友人たちは「よくやるよ」とひやかしています。

造形教育連盟にかかわったのは、野村先生が委員長をされていた時代です。退職するまでの長い間、根室の造形教育をはずかっかっていたものの、これといった実績を残すこともなく過してしまいましたが、私自身にとっては、連盟のみなさんから教えられることがいっぱいあって、私の教員生活を支えていただきました。

年毎に、桜の開花のようすの違う北師会館での連盟総会は、在職中のよい想い出のひとつです。感動源、や指導の構築、みずみずしい中味、やしなやかな子ども、など、造形教育に携っていなければ表現できないユニークなことばを次々と生み出し、道内の図工・美術に関心の高い先生方の創り出す心に、新風を送りこんだことも忘れることができません。

造形教育 イコール 心の教育

「絵ばかり描いていないで、少しは勉強したらどうなの」と、母親が子どもを叱っているという話をよく聞くのですが、つまるところ、図工・美術は勉強としてとらえられていないからなのでしょう。

戦後、生きるために、経済的な面や物質的な面へのみ大人社会が動いていて、子どもたちの心の教育まで考えている余裕がなかったことが、平和で豊かな時代

になっても、まだ、続いていて、心の教育がおろそかになっているようです。そのために青少年にかかわって、学校でも家庭でも地域社会の中でも、いろいろと問題提起がなされているように思います。

「少しは図工に取り組んで心を休め、新しいエネルギーを生み出したらどうなの」と、子どもを励ます母親がふえて欲しいものです。図工・美術は、豊かな人間性を育てる、いわば、戦後おちこんでいた心の教育に欠かすことのできない教科であることを、再認識させたいものです。

教育界のリーダー イコール 造形連盟会員

なつかしさのあまり、昨年8月の旭川大会に参加しました。久しぶりに、全道の造形教育をリードされている連盟の先生方をお見かけしてうれしくなったり、分科会での意欲的な研究に拍手をしたり、幼小中高の総合作品展に感動したりして、現職当時の気分を味わいました。そして、造形教育に造詣の深い教師は、北海道の教育をリードしていく教師であるとの感を強くしました。

全道小学校長会の理事をしていたころ、造形教育に携っている校長先生方が、重要なポストについて活躍しておられることに「快哉」を叫んだものでした。また、造形教育連盟の会員にも、多くの校長先生や教頭先生がいらっしやるわけですが、それはまさに、自然美や人間愛を大切にしたい造形教育の心をもとに、子どもたちに接し、子どもたちを育ててきたからに違いありません。美を愛する者は、自らの心も磨かれて、人をひきつける魅力が備わるのでしょうか。

豊かな感性 イコール 幼児期の造形教育

戦後の子どもたちは、耐性や感性に乏しい子どもが多いといわれています。感性の豊かさに直接かかわっている教科といえば、それは、図工・美術といっても過言ではないと思います。殊に、幼児期に感情体験をさせることが大切であるといわれ、幼児期における造形遊びが見直されています。子どもには、健康な想像力を養ってやらなければなりません。そのためには自然の雰囲気の中で、遊びをとおして想像力を身につけ

させるとともに、家庭生活の中に、美的な雰囲気と情操を高めるような文化が充実していることが望まれます。幼児をできるだけ美しい自然や絵画にふれさせるなど、色彩や形などの調和のとれた環境の中で生活させることが大切です。家庭でも、子どもが好きな時にいつでも描けるように、手近なところに紙やクレヨン鉛筆を置いておくのも効果的です。幼児は、気がむけばクレヨンを持って紙の上にいろいろと描くものです。描きたいと思うものの形も十分でないまま、描いて楽しむものです。よい絵本を幼児の手の届く所に、何気なく置いたりすることも、美しいものに親しむための手だてとなります。そのことが、無意識のうちに豊かな感性を育てることになると思います。学校教育の中でも、子どもの感性を育てるために、いろいろなことが試みられているのですが、もう一工夫あってもよいように思います。

日常生活の中で、数多くの感情体験をすることから、環境を通して刺激や印象を受け入れる心を広めたり、それを素直に受けとめるような心が養われます。安らいだ気もちで、豊かに受け入れるようになると、強い感動を受けたものを、積極的に、ことば・絵・歌・身体活動など、さまざまな形で表現するようになると思います。

上手に表現させようとか、形式がどうかなどとは考えないで、幼児がこだわることなく、自由にのびのびと感じているままに、いろいろな形で豊かに表現させることが、将来の豊かな情操への基礎となり、芽ばえとなることを考える時、幼児期の造形教育も、もう一歩踏みこんで指導の手だてにメスを入れる必要があります。そこでではじめて、幼小中高の造形教育の一貫性が成り立つのではないのでしょうか。

余生の心の支え イコール 美への関心

過日、本町にスピードスケートの日本のホープである橋本聖子選手が、子どもたちとのふれあいのために来てくれました。「どうしたら、橋本選手のようにスケートが上手になれるのですか」という子どもたちの質問に答えて「目標をきめて、そのめあてが達成できるようにがんばることが大切です。目標が達成できたら、また、新しい目標をきめて、それにむかって努力することです」と話していましたが、一流を極めた人というものは、年齢にかかわらず、おちついていてしっかりしたものの考え方をするものだと感心しました。

それは、厳しい試練に耐え抜いて、自ずと身についた風格からくる言動なのでしょう。

何ごとも、めあてをもって努力することは大事なことなのでしょうが、根気のいることです。造形教育もまた、創り出すよろこびの心をどう育てていくべきか、地道な活動で教科のめあてを達成して欲しいものです。

絵筆を取る機会もあまりなく、子どもの作品にふれる場面も少なくなってきていますが、美に対する感覚だけはさびつかせたくないと思っています。先ごろ放映された「古代ギリシャからピカソまで」のテレビを視聴したり、ときどき、小・中学校の図工・美術の教科書を見たりしながら、現職時代をなつかしむとともに、うるおいのある美を求め続けています。

川野上 彰先生に学んだこと

職員室の雰囲気が明るく思いやりがあり、協働の精神に満ちている——昭和57年4月、別海中央小学校に赴任して真っ先に感じたことでした。

このすばらしさは、ひとえに川野上校長先生の卓越した指導力によるものだったのです。謙虚で己に厳しく他にはやさしくというお人柄を忘れてはなりません。なによりも「教職員・子供一人ひとりを大切に育てる」という姿勢で経営にあたられた成果でした。

歴任された学校のそれぞれに「葉緑会」「知床会」「ひとつの会」等々、教え子や音楽を共にした教職員が、当時の絆をいつまでも結び合おうと、毎年のように集ってくることで、だれからも尊敬され、慕われていた先生のお人柄・力量が伺えます。

川野上校長先生の思い出と言えば、子供や父母に対する「講話」があります。教育哲学に裏うちされた味わい深いお話は、絶妙な抑揚や間の取り方と相まってそれはすばらしいものでした。お書きになる文章も見事なもので、とりわけ随想はまさに天下一品です。また海の青さと緑の大地「別海」を題材にしたシルク印刷の年賀状も多くの方が楽しみに待っています。

「今、教師に求められているのは感性に富んだ人柄、郷土に根づく教育にかける情熱である」と説く先生の言葉も私の心に脈打っています。

別海町立上春別小学校長 菅原 満

一致協力は伝統の賜物

室蘭市教研の中で、造形部会の仲の良さは、昔から他の部会をうらやましがらせてきました。それは、戦後の美術教育を支えてきた大先輩から次々と受けつがれて、今日に至っているのですが、皆が一体となつて事に当たってきた慣例が良き伝統を育ててきたのだと思います。

その昔、室蘭市に体育館ができた時には、ロビーの大壁画をレリーフで製作したり、大きな大会のステージのパネルや看板を請負ったり、科学館の催し物のパネルを製作したり、等々。

その為に、放課後集まって板を切り、色を塗り、文字をかき、絵をかき、終わったら酒を酌み交し、そんな日々が何日も続くのです。この様な仕事の中から一致協力と仲が良いというすばらしい伝統が育っていったのです。

だから、第32回全道造形教育・室蘭大会の時も、部員の協力一致の姿に改めて感動しました。そして、何よりも良かったのは、大会を創造していく過程を通して、お互いの人間的な理解がより深まり、友情と信頼に裏打ちされた強い絆が生まれた事でした。そして、若い人が育っていきました。大きな感動を皆で共有し合ったという事で、この室蘭大会は、私達に大きなお土産を残してくれたのです。

研究の取り組み

室蘭市教研は同一テーマで2年継続の研究を行っています。部会の役員も2年位で交代しますが、引続き4年も頑張ってくれる人もおり頼もしい限りです。現在の部長は松野満朗先生で暖かい人柄が魅力です。副部長2名、授業者を含めた研究委員若干名、以上で授業研究グループが構成されます。他の部会では、この人選に手間どる様ですが、当方では案外すんなりときまっています。

全市的な研究発表会は10月です。午前中に小と中の2つの授業を全員で見て、小と中の2つの提言があります。午後は分科会で、各自が実践した作品を持ち寄ります。目の前に子どもの作品が数多く並べられるので活気のある討論が続けられます。作品を持ち寄る事で研究会が皆のものになります。この研究会で実践家が育っていきます。が、どうしても、むずかしい理論

的なものが敬遠されがちで、その為に、室蘭は理論に弱いという弱点があることを否めません。

授業研究の他には、小中学校造形展が春と秋の2回デパートで開催され多くの市民の足を運ばせます。研修行事としては、夏のヌードデッサン会と秋の実技研修会があり、今年は木彫の実習を行いました。



楽しきかな 我等が造形部

造形部員には酒豪が多く、飲んでは語り飲んで歌い、宴会にはすぐに集まります。研究会の後のご苦労さん会は勿論、退職された先生の還暦祝賀会や激励会にも多くの部員が集まります。

恒例となつてしまった造形部冬の行事、スキー大会には30名もの部員が参加します。大和ルスツの宿の人達ともすっかり仲良くなり、滑れない人は段ボールで尻滑りを楽しみます。スキーそのものも楽しいが、夜のウイスキーの方がもっと好評で、その評判を聞いて他教科からも参加してくる様になりました。

第33回留萌大会には、自家用車4台を連ねて13名が参加しました。誰かが音頭をとるとすぐにまとまってしまうのです。大会後に焼尻島に渡り、夜、函館の先生方と合流して酒を酌み交したのが良い思い出となっています。第35回の函館大会も15名が参加しました。江差松前を回り楽しい思い出を作りました。今年も又誰かが音頭をとってくれそうです。今までもそうであった様に、これからも楽しい造形部が続きます。仲良き事は楽しきかな、楽しき事はすばらしきかな、いつまでも、このすばらしい伝統が続いてほしいと念じております。

(文責・室蘭市立御前水中 武田 貢)

実践校紹介

浦臼町立晩生内小学校

本校は、浦臼町の南西にあって国道 275 号線沿いに面し、J R 札沼線では晩生内駅で下車をすると徒歩で 5 分程の所に位置しています。

樺戸山に連なる雄大な山々を背に、右手には石狩川に流れを注ぐ晩生内川を眺めながら広大な田園風景が続く、水田を中心とした恵まれた農業地帯です。

子どもの数 54 名、複式 1 学級を含む 5 学級編成の小規模校ですが、57 年に新築した校舎と外には 2 つのグラウンドを持った恵まれた教育環境の中で子どもたちはのびのびと毎日の学校生活をおくっています。

59 年より「アウト・ドア・スクール」を標題にした「体験学習」重視の教育実践を展開してきました。

この実践の中核は、「学校農園」ですが、造形的な活動としては、「野焼き」の実践があります。

初体験の 59 年は全くの手探りで、実践記録を片手にしての体験でしたから、作品の形を大きく損う失敗でした。続く 2 年日の実践は、全校の作品を集めて、失



敗を教訓にしての実践でしたが、どの作品も平均に上できるところまではなりませんでしたが、グラウンドに作品を並べ、木材やワラなどを使っての火の造形は、子どもたちにとって大きな感動でもあったようで毎年続けて実践することになりました。

今年は、第 24 回「全空知子どもの作品を語る会」の会場校にあたりました。「火と土と生活」をテーマにしていますので、子どもたちと共に「野焼き」の実践をぜひ成功させたいと考えています。

(晩生内小学校 川村 恒夫)

実践者紹介

繊細さを生かして

温厚で優しく、女生徒から人気のある美男子です。仕事は几帳面で 1 mm のく ruim も許しません。絵を描いても繊細な作品が多く、性格が表われています。専門は木工芸です。2 年生にパズルを作らせて立体造形展に多く入選しています。

彼の几帳面で繊細な才能を広報関係に生かし、P T A の広報活動をうけもち、昨年、P T A 広報紙のコンクールでみごと入賞しました。また、学年通信でも自作イラストを多く入れ、すぐれた楽しい通信を毎週出していました。今年も学級通信にこっています。太陽というタイトルですが、そのシンボルマークを毎回かえてデザインしているところが見ものです。

美術部の活動も熱心で毎年のように夏休みにスケッチ旅行をしています。小樽の海をかきに行ったり、芸術の森へ行ったりたのしそうです。道立近代美術館も近いので生徒をよくつれて行きます。

このような彼は授業でも生徒一人ひとりに必ず一言

岡島 仁志 先生 ・札幌市立八軒東中学校



ずつ話しかけ、丁寧に指導します。その優しい指導で生徒はめきめきと力をつけています。よい作品がどんどんでき全道教育美術展や立体造形展に生徒の作品が入選することをたのしみにしています。

(文・八軒東中学校 安原 正)



第37回全道造形教育研究大会紋別大会

- ・大会テーマ 子どもの心をゆり動かす造形教育
- ・紋別テーマ 表現の喜びにひたる子どもを育てる
- ・会 期 1987 / 7 / 28日(火)~29日(水)
- ・会 場 紋別市立紋別小学校



紋別市立紋別小学校

画筆ネオセブロン

この筆を使って、絵をかいた子どもたちの、話をまとめると、次のようになる。

- ・えのぐの筆みたい。
- ・やわらかくかける。
- ・えのぐ（丸筆）にくらべてかきやすい。
- ・筆がすべりやすい。
- ・毛の先がやわらかいからかきやすい。
- ・太い線も、細い線もかきやすい。

筆が、書道の筆とにていることもあり、子どもたちは、それとくらべて見ている。



札幌市立澄川西小学校 5年 谷本紅実・松浦孝子

書道では、筆圧をコントロールして、情感に富む、太さに変化のある、表現ができることは、よい筆の条件とされている。この筆は、水彩えのぐの筆であるがそれが、容易にできると、子どもたちは知っているのである。筆圧のコントロールが容易なのは、この筆の毛の腰の強さにある。子どもは、筆圧をコントロールして、太さに変化のある線を表現するのは、にがてである。この筆では、それが、容易である。

子どもたちの感想は、「やわらかい」「よくすべる」「かきやすい」といっている。これは、この筆が、すべりがなめらかであるということである。筆のすべりがよいことは、情感ある、太さに変化のある線にかくのには、欠くことのできない条件である。

以上、この筆は、毛の腰の強さと、すべりのよさの二大特徴をもち、この二つは、豊かな情感ある、変化に富んだ線を表現するには、欠くことのできない条件である。
(文・札幌・澄川西小 岡田義博)



サクラ画筆ネオセブロン (特大) 新発売

- しなやかなセーブルタッチの描き味です。
- 子どもたちの手・指の延長として、画面に表現します。



4000-9799002



株式会社 サクラクレパス 札幌営業所

札幌市中央区南4条西13丁目
〒064 TEL (563) 5161(代)

あ と が き

お忙しい中を原稿本当面に有難うございました。第37回紋別大会でまたお会いしましょう。

吉田(新川中央小)・伊藤(東苗穂小)・安原(八軒東中)・村谷(北栄中)・伊藤(澄川西小)